

江戸貸本屋の世界

令和7年9月13日(土)～令和7年11月30日(日)



私たちが読書経験を振り返るとき、物語の続きを気になって時間を忘れて読みふけった——そんな覚えは、誰しもあるのではないでしょうか。本は知識や娯楽をもたらし、私たちの暮らしを豊かにしてくれる大切な存在です。

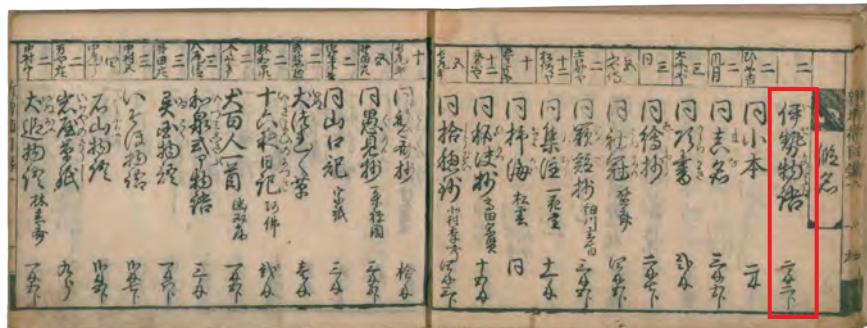
江戸時代、庶民に読書の喜びを届けたのが「貸本屋」です。「三千世界しょい歩く貸本屋」という古川柳にあるように、貸本屋は、異国の話や怪異談、愉快な物語など夢のような世界を風呂敷包みにたくさん詰め、人々のもとへ運んでいました。

本展では、貸本屋のしくみや工夫を通して、江戸時代の読書文化をご紹介します。当時の人々の読書の楽しみにふれながら、本の魅力をあらためて感じていただけましたら幸いです。

第1章 貸本屋の誕生と発展

江戸時代に活躍した貸本屋

貸本屋とは、本を貸し出して収益を得る商売、または担い手である商人のことです。その始まりは寛永(1624~1644)頃の行商本屋の兼業と考えられ、木版印刷の普及により庶民向けの読み物が多く出版される時代の流れと重なります。本が商品として広く流通するようになった背景には、江戸時代の読者層の広がりと読書熱の高まりがありました。しかし、当時の本はとても高価で、たとえば『伊勢物語』は銀2匁2分、庶民の食事数日分に相当する値段でした。そこで、購入せずに手軽に読める手段として貸本屋が発達したのです。現代の図書館やレンタルショップのような存在だといえるかもしれません。



『増益書籍目録』/ 宝永6年(1709) / 国立国会図書館デジタルコレクション

品目	価格	
	銀	銭
『伊勢物語』	2匁2分	147文
京都職人日当	1匁5分	100文
江戸職人日当	2匁4分	160文
米5kg	5匁	167文
そば	—	16文

江戸中期の物価

元禄13年(1700)の公定相場(銀60匁=銭4000文)にて算出
参考/小野武雄 編著『江戸物価事典』展望社(1991)

江戸時代の後期になると、貸本屋の数はさらに増加します。文化5年(1808)の記録には、江戸で組合に所属していた貸本屋は645人いたことが記されています。多くは本屋との兼業や個人営業だったため、実際の数を正確に知るのは困難ですが、貸本屋が挿し絵や俳句にたびたび登場することからも、彼らが江戸の暮らしに自然に溶け込み、身近な存在だったことがうかがえます。



『吉原恋の道引』/菱川師宣 画/幕末明治頃 写
西尾市岩瀬文庫所蔵

吉原への道中風景や廓中風俗を各見開きに描いた絵本で、延宝6年(1678)に出版されました。上段には遊女の家紋が並び、2段目には案内記として吉原の由来などが見開きごとに詳しく記されています。3段目には風俗の絵が添えられ、読者を吉原の世界へと導きます。本頁の右下には、笈箱を背負って本を手にした貸本屋が、格子越しの遊女を振り返って眺める姿が描かれています。

日本一の蔵書を誇った貸本屋「大惣」

「大惣」は、かつて名古屋長島町(現・名古屋市中区)にあった貸本屋「大野屋惣八」の通称です。初代・惣八が集めた書籍を人びとに見せていたのが始まりで、貸本屋としての創業は明和4年(1767)頃とされます。屋号は創業者が知多郡大野村(現・常滑市)出身であることに由来し、酒屋や薬屋を兼業していた時期もありました。

大惣は幅広いジャンルの書籍を扱い、仕入れた本は売らない方針を貫いたことで膨大な蔵書数を誇り、明治末期の廃業時には2万冊以上を所蔵していたとされます。「大惣に行けば大抵の本が読める」と評され、全国の知識人に影響を与えました。

人物	大惣との関係
曲亭馬琴	江戸時代後期の読本作家。 「書肆は風月堂、永楽屋、貸本は胡月堂」と書き記す。 (胡月堂は初代大野屋惣八の号)
坪内逍遙	明治時代の小説家、劇作家。 大惣には足しげく通い「心の故郷」と述べている。
水谷不倒	明治時代の国文学学者。 幼い頃から大惣にはほとんど毎日のように足を運んだ。

大惣を利用した著名な人物

営業スタイル

- ① 店舗を持つ場合もあるが、得意先を巡回して選書・貸し出しを行うのが一般的なスタイル
- ② 訪問先は、町人・商人の家のほか、遊郭や湯治場、芝居小屋の楽屋内など広範囲

『倡客竅学問』
十返舎一九著/享和2年(1802)刊
西尾市岩瀬文庫所蔵

遊郭を訪ね本を勧める貸本屋と、それらを興味深く手に取る遊女の姿が描かれています。遊女にとって読書は、客を待つ合間に物語を楽しむこともあります。上客との会話に備えて教養を身につけるための手段でもありました。遊郭に出入りする貸本屋は、遊女たちが教養を深め、文芸に親しむ機会を提供する文化的な担い手でもありました。



営業先では、持ち込んだ本を確実に貸し出し、そして次の注文につなげるために、巧みな営業トークを展開します。まずはあいさつとともに「前回の本はいかがでしたか?」と反応をうかがい、「その続きを持ってきてましたよ」と本を差し出します。さらに、ちょっとした面白話で客の心をつかみ、新たな本を勧めながら、次の注文を自然に引き出していくきます。

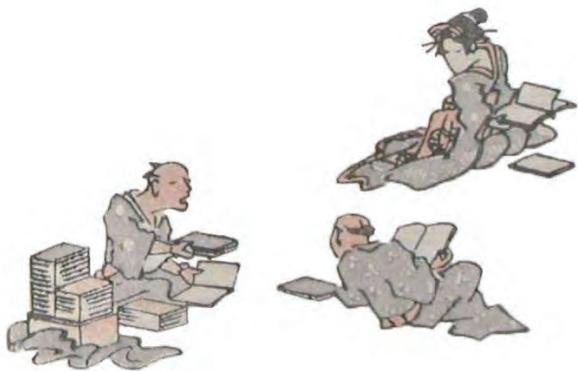


『画本柳樽』(一部加工)/八島五岳・葛飾北斎画
天保11~15年(1840~1845)刊
西尾市岩瀬文庫所蔵

江戸時代中期の川柳集『誹風柳多留』の句それぞれに新たに絵を添えた川柳絵本で、滑稽で風刺の効いた句とともに、庶民の暮らしや風俗がユーモラスに描かれています。中には貸本屋が客を相手にする場面や、読書を楽しむ人の姿などもあり、当時の人びとがどのように本に親しんでいたかがよく伝わります。

顧客維持の戦略

- ① 常連客の好みを把握し、個々に合わせて選書して提供
- ② 流行を敏感に察知し、話題作をいち早く提供
- ③ 人気作は複数冊を用意
- ④ 禁制本は写本で対応
- ⑤ 繼本(続編)を活用し、客の関心を維持



『芝翫節用百戲通』/暁鐘成編/狂画堂蘆洲画
文化12年(1815)/東北大学附属図書館所蔵
※本展では西尾市岩瀬文庫所蔵本の表紙を展示しています。

江戸時代の人気歌舞伎役者・中村芝翫(三代目中村歌右衛門)について、役柄や芸風、逸話などを挿し絵入りで紹介した一冊です。歌舞伎が庶民の娯楽の中心だった当時、憧れの存在である役者を紹介した本は大人気でした。本展で展示した岩瀬文庫所蔵本の表紙には「大はやりもの一日切かし本」と墨書きされた付箋が貼られており、話題の作品を短期間で次々と貸し出すことで、効率よく回転させて収益を上げていた様子がうかがえます。

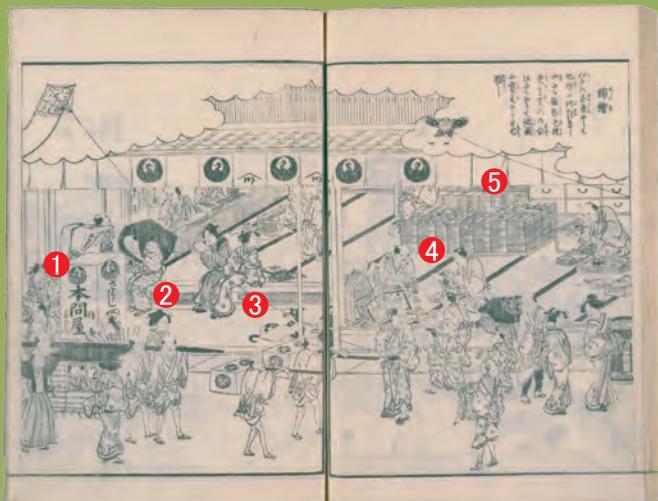
第3章 庶民の読書の楽しみ方

娯楽としての読書と読書姿勢

江戸時代の庶民にとって、読書は知識を深める手段であると同時に日々の楽しみでもありました。当時の本は、仏書や医学書などの教養書と、草紙などの娯楽性の高い読み物に分類され、それぞれ扱う本屋も異なっていました。草紙は、十返舎一九や山東京伝の作品に代表されるような絵入りの滑稽本や黄表紙などがあり、貸本屋を通じて広く流通しました。これらの娯楽本を「手軽に借りて楽しむ」という文化が、庶民の日常となっていました。

江戸の本屋「鶴屋喜右衛門」

鶴屋喜右衛門は、江戸の通油町（現・東京都中央区）に店を構えた出版の老舗です。もともとは京都の書物問屋でしたが、江戸に進出してからは庶民向けの本を扱う地本問屋（絵草紙屋）として、錦絵や絵草紙などの出版を手がけ、江戸の出版文化を支えました。



① 鶴屋の行灯看板

② 鶴屋から仕入れた本をかつぐ貸本屋、または他の本屋

③ 店先で試し読みをする女性たち

④ 錦絵または本を選ぶ客

⑤ 山のように積まれた錦絵または絵草紙

『江戸名所図会』「錦絵」/斎藤幸雄・幸孝・幸成 編/長谷川雪旦 画
天保5~7年(1834~1836)刊/国立国会図書館デジタルコレクション

『江戸名所図会』は、斎藤幸雄が寛政年間(1789~1801)に調査・執筆を始め、子・孫へと三代にわたって引き継がれ、約30年かけて完成した江戸の名所案内書です。全20冊が刊行され、町の様子や名所、風俗などが絵とともに紹介されています。

この「錦絵」には、正月の賑わいに包まれた本の出版・販売店「鶴屋喜右衛門」の店頭が描かれ、当時の出版文化の一端を伝えています。

当時の人びとが読書を自由に楽しんでいたことは、その読書姿勢からもわかります。机にきちんと座って読むだけが読書ではなく、畳の上に正座しながら肘をついて読む人や、寝転がって読む人の姿などが江戸時代の本から見ることができます。こうした風景からは、読書がくつろぎの時間であったことが伝わってきます。



『北斎漫画』(一部加工)

葛飾北斎 画

文化11~明治11年(1814~1878)刊

西尾市岩瀬文庫所蔵

江戸時代後期の浮世絵師・葛飾北斎による絵手本集で、北斎の没後も刊行が続き、全15編が世に出ました。人物や風俗、動植物、妖怪など多彩な題材が生き生きと描かれています。こうした絵からは、時間を忘れて本にのめり込んでいるような姿や、並んで本を見ながら話す子どもたちのほほえましい姿など、本との関わりの一コマを見ることができます。



『北斎道中画譜』(一部加工)

葛飾北斎 画/明治10年(1877)

信州大学附属図書館所蔵



『團扇繪づくし』(一部加工)

菱川師宣 画/天和4年(1684)

国立国会図書館デジタルコレクション



『傾城買二筋道』

梅暮里谷峨著/雪華画

寛政10年(1798)刊

西尾市岩瀬文庫所蔵

この物語には、容姿は美しいがうぬぼれやの男と、見た目は冴えないが誠実な男という対照的な二人が登場します。遊女への接し方の違いを通して、誠実さが人の心を動かす様子を描いた大人向けの娯楽作品です。口絵には、読書中にうたた寝をして夢を見る作者の姿が描かれ、背後の本箱には「南齊書」「史記」といった歴史書が並んでいます。書物に囲まれ物語を紡ぐ姿は、本が想像力を育む力となることを表しているようです。

本への落書き

貸本として多くの人の手を渡った江戸時代の本には、人物絵にいたずら書きを加えたり、見返しに自慢の絵を描いたりといった落書きがしばしば見られます。これらの痕跡からは、当時の人びとが読書を心から楽しんでいた様子がうかがえます。また興味深いのは、こうした落書きが個人の蔵書よりも貸本に多く見られ、このことは「貸本＝娯楽＝消費材」という読書文化があったことを示しているようです。知識として蓄える蔵書とは異なり、貸本は読んで楽しんだら返す「使い切る読み物」として親しまれており、落書きもそのような気軽な読み方のなかで自然に生まれたものだったかもしれません。

貸本への落書きの種類

落書きの種類	内 容
顔の擦り消し	登場人物、特に悪役の顔を指でこすって消す行為。
挿し絵への落書き	人物に目鼻口や髪を書き加えるもの。特に坊主に髪を描いたり髪を伸ばしたりする。 貸本屋が「髪を描くな」と注意書きを残すほど頻出した。
挿し絵への会話文の書き加え	挿し絵の人物にセリフなどを加える。
猥雑な描写	男性の裸体などを描く。
作品への評論や愚痴の書き込み	「この本は面白くない」「貸本屋の見料が高すぎる」などの書き込み。
模写・彩色	北斎の挿し絵を模写したり、挿し絵に彩色を施す。
漢字の手習	字の練習。

ミギー・ディラン著「大惣本の落書き」
『言語文化論集 35(1)』(2013)をもとに作成



『諸国ふんくは物かたり』/江戸時代前期刊

西尾市岩瀬文庫所蔵

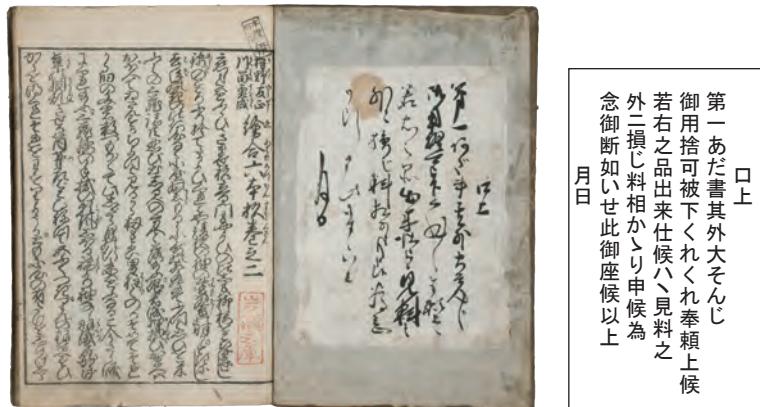
禪僧で仮名草子作家でもある鈴木正三の仏教説話集『因果物語』をもとに抄出・改編された本で、全18話の怪談を収録しています。

見開きには、読者が大蛇の舌を描き加えて、人の顔をなめ回すような恐怖の場面に仕立てたり、「こわやこわや やれこわや」と、ちょっとおどけたセリフを書き添えたりと、当時の人びとのいたずら心がこれらの落書きに垣間見えます。

貸本屋の対策

読者の感想や遊び心が表れた書き込みは、作品の内容や絵を楽しむあまりの行為ともいえますが、貸本屋にとっては本の価値を損なう迷惑行為でした。本の損傷や又貸しも大きな悩みの種であり、貸本屋は本に注意書きを記した付箋を貼って、対策を講じました。

読者の本へのいたずらの内容や、こうした注意書きに込められたメッセージの一つひとつは、貸本屋を大いに悩ませた事柄です。しかし今となっては、当時の人びとの暮らしや、本との向き合い方を伝える貴重な史料となっています。



貸本屋による注意事項の例

- 一、落書きしないこと
- 一、たばこの火で焦がさないこと
- 一、油をつけないこと
- 一、ねずみにかじられないこと
- 一、釜敷や枕代わりにしないこと
- 一、子どもに遊ばせないこと
- 一、坊主に鬚を描いたり、女性の顔にひげを描いたりしないこと
- 一、又貸しをしないこと

『〈新板絵入〉絵合六本杉』
青紅友耕 著/安永7年(1778)刊
西尾市岩瀬文庫所蔵

鞍馬山の天狗・僧正坊が、大唐の天狗・是界坊を味方につけて謀反を起こす物語を描いた浮世草子です。この本には、貸本屋による墨書きの付箋が付いています。そこには、「落書きやその他の大きな損傷によって本が使い物にならなくなった場合は、見料とは別に損害金を請求する」という内容が記されています。本をぞんざいに扱う利用者への悩みと、それに対する厳しい対応がうかがえます。

第4章 本を借りる文化の変化～図書館へ

貸本屋から図書館へ

江戸時代の貸本屋は草紙や読本などの娯楽本を扱い、庶民の文化を支える存在でした。行商人は訪ねた家々の茶の間で家人の好みに合う本を勧め、貸していく。こうしたスタイルの貸本屋は、明治期になると次第に姿を消していきます。その背景には、活版印刷の普及による書籍価格の低下、国家主導で整備された近代図書館の登場がありました。明治20年代には店舗型の「新式貸本屋」が現れ、学術書や翻訳書を安く貸し出すようになります。これらは教育や知識の場として定着し、学生や研究者を中心に利用が進みました。

では、庶民の娯楽を担う貸本文化が途絶えたかというと、そうではありません。1950年代には駄菓子屋を兼ねた貸本屋から貸本マンガが爆発的な人気を集め、模図かずおや水木しげるといったマンガ家を輩出しました。短期間ではありましたが江戸時代の読書文化の流れに連なる場として親しました。

その後、テレビや雑誌など新しい娯楽の台頭により、貸本屋は再び姿を消していきます。しかし、現在も図書館という場に「本を借りる」という文化はしっかりと受け継がれています。現代の図書館では、絵本から日常に役立つ実用書、気軽に読める娯楽本など多種多様な本が揃い、誰もが楽しめる場となっています。スマートフォンやタブレットを通じて本を読む時代となった今でも、紙の本を手に取り、選び、借りる体験は、読書の原点を思い出させてくれます。

① むかしの「貸本屋」というおしごと

えどじだい(1603~1868)には、今は見かけないおしごとがたくさんありました。そのひとつが、「貸本屋」です。

今の、としょかんやレンタルショップとでいいますが、少しちがいます。貸本屋さんは、たくさんの本をふろしきにつつんで、おきゃくさんとのころにはこんでくれるのです。むかしは本がとても高かったので、みんな貸本屋さんから本をかりて読んでいました。本を読みたい人がたくさんいたので、貸本屋さんもたくさんいました。

むかしは、ほかにどんなおしごとがあったのかな?
としょかんでしらべてみるのもいいね!



② 貸本屋さんは本のおすすめ名人!

貸本屋さんは、おきゃくさんにたくさんの中を読んでもらうために、本屋さんやほかの貸本屋さんと本を売ったり買ったりして、いろいろな本を手に入れていました。ときには、おきゃくさんが「読みたいな」と思うような本を自分で作ることもありました。

それから、おきゃくさんの家に行って、おすすめの本のおはなしをおもしろく話します。みんながよく読む本や、その人にぴったりの本をえらんで、かしてくれるのです。

そんなおはなしを聞いたら、つい読みたくなっちゃいますね!

みんなは、どんな本が読みたいかな?

③ むかしの人も本がだいすき!

むかしの人も、本がだいすきでした。ひじをついたり、ねっころがって読んだりして、読書を楽しんでいました。

あまりにもすきすぎて、本にらくがきをしてしまうこともあります。そんなとき、貸本屋さんはこまってしまします。本は、おしごとの大切などうぐだからです。だから、かりる人にお願いをします。「らくがきをしないでください」「よごさないでください」「本をまくらにしないでください」まくらにすると、よごれたり、こわれたりしてしまいます。

みんなも、本は大切にしてくださいね。

まくらにしとったんかーい!



『傾城賈二筋道』/西尾市岩瀬文庫所蔵
※見やすやすくするために少しだけ絵を加工しています。

④ 貸本屋さんからとしょかんへ

家まで本をもってきてかしてくれた貸本屋さんですが、しだいにすがたをけしてしまいます。

本のねだんがやすくなつて、自分で買えるようになつたり、テレビやゲームなど、楽しいものがふえたりしたからです。

でも、本をかりて読む文化は、べつの形でのこりました。

みんなのすむ町にはとしょかんができる、いろいろな本をお金をはらわずにかりることができます。としょかんには、貸本屋さんのかわりに「しょさん」がいて、どんな本があるか、教えてくれます。

これからも、すてきな本との出会いがみんなにありますように!



主催
西尾市立一色学びの館

「江戸貸本屋の世界」展示目録

No.	章	内容	資料名	編著者/年代	数量	所蔵
1	1	貸本屋の姿	『大坂繁花風土記』	辻泉老人/大正12年(1923)出版	1	西尾市岩瀬文庫
2			「四時交加」(『日本名所風俗図絵』11内)	山東京伝 著/北尾重政 画 寛政10年(1798)刊	1	西尾市岩瀬文庫
3			『吉原恋の道引』	菱川師宣 画/幕末明治頃 写	1	西尾市岩瀬文庫
4	1	大惣	『ことばくつ』	塊翁 編/近世後期刊	1	西尾市岩瀬文庫
5			『痴漢三人伝』	感和亭鬼武 著/文化3年(1806)刊	1	西尾市岩瀬文庫
6			『名古屋四達記』	堀貞義 著/近世後期 写	1	西尾市岩瀬文庫
7			『(新板改正)文化武鑑』2	須原屋茂兵衛 版/文化6年(1809)刊	1	西尾市岩瀬文庫
8			『夏の富士』	山東京山 作/歌川国貞 画 文政11年(1828)出版	2	西尾市岩瀬文庫
9	2	仕入れ	『(三井寺濫觴)江州一景録』1	安永4年(1775)刊	1	西尾市岩瀬文庫
10			『醒睡笑』上	安楽庵策伝 編著/万治元年(1658)刊	1	西尾市岩瀬文庫
11			『(新版絵入)赤染右衛門綾輦』2	一瓢軒 著/宝暦4年(1754)刊	1	西尾市岩瀬文庫
12			『玲瓏隨筆』1	沢庵 著/安政6年(1859)刊	1	西尾市岩瀬文庫
13			『戯男伊勢物語』1	頭少々禿麿 著/寛政11年(1799)刊	1	西尾市岩瀬文庫
14			『(新版絵入)昔文化粧桜』1	八文字其笑・八文字瑞笑 著 延享5年(1748)刊	1	西尾市岩瀬文庫
15			『根南志具佐』	天竺浪人 著/宝暦13年(1763)刊	1	西尾市岩瀬文庫
16			『琉球人来朝行列図』	歌月庵 画/天保3年(1832)刊	1	西尾市岩瀬文庫
17	商品管理	『(新版絵入)夕霧有馬松』	八文字自笑・八文字其笑 著 近世中期刊	5	西尾市岩瀬文庫	
18			『倡客竊学問』	十返舎一九 著/享和2年(1802)刊	1	西尾市岩瀬文庫
19	営業	『草津繁昌記』	堀秀成 著/明治14年(1881)写	1	西尾市岩瀬文庫	
20			『風流俄天狗』初編1	村上杜陵 作/浦川公左 画 天保3年(1832)刊	1	西尾市岩瀬文庫
21			『芝翫節用百戯通』	暁鐘成 編・狂画堂蘆洲 画 文化12年(1815)	1	西尾市岩瀬文庫
22	読書姿勢	『画本柳樽』	八島五岳・葛飾戴斗 画 天保11~15年(1840~1845)刊	8	西尾市岩瀬文庫	
23			『北斎漫画』2,8,15	葛飾北斎 画 文化11~明治11年(1814~1878)刊	3	西尾市岩瀬文庫
24			『駿温泉華』	鳥居清長 画/安永7年(1778)刊	1	西尾市岩瀬文庫
25			『傾城買二筋道』	梅畠里谷峨 著/雪華 画 寛政10年(1798)刊	1	西尾市岩瀬文庫
26			『戯男伊勢物語』5	頭少々禿麿 著/寛政11年(1799)刊	1	西尾市岩瀬文庫
27	3	本への落書 いたずら	『(唐土談語)空虚解紐』1,5	秋里湘夕 撰/天明7年(1787)刊	2	西尾市岩瀬文庫
28			『廓大帳』	山東京伝 著/天明9年(1789)刊	1	西尾市岩瀬文庫
29			『本朝会稽山』5	八文字自笑・江島其碩 著 享保13年(1728)刊	1	西尾市岩瀬文庫
30			『北国順礼唄方便』	曲亭馬琴 著/寛政9年(1797)刊	1	西尾市岩瀬文庫
31			『日本多右衛門』	桜川杜芳 作/北尾政演 画 天明3年(1783)刊	1	西尾市岩瀬文庫
32			『諸国みんくは物かたり』	江戸時代前期刊	1	西尾市岩瀬文庫
33			『(画図)百鬼夜行』	鳥山石燕 著/安永5年(1776)刊	2	西尾市岩瀬文庫
34			『(仁政美談)糸迺調 第二輯』1	鶴亭秀賀 著/幕末 写	1	西尾市岩瀬文庫
35			『北越奇談』4	橘崑崙 著/柳亭種彦 校合/葛飾北斎 画 文化9年(1812)刊	1	西尾市岩瀬文庫
36	貸本屋の 対策	『(新版絵入)絵合六本杉』2	青紅友耕 著/安永7年(1778)刊	1	西尾市岩瀬文庫	
37			『川童一代嘶』1	後穿窟主人 著/寛政6年(1794)刊	1	西尾市岩瀬文庫
38			『筆のすさび』2	橘泰 著/文化3年(1806)刊	1	西尾市岩瀬文庫
39			『猿著聞集』2	八島定岡 著/文政10年(1828)刊	1	西尾市岩瀬文庫
40			『名物鹿子』2	露月・輔兄 編/明治40年(1907)復元	1	西尾市岩瀬文庫
41	江戸の本屋	『江戸名所図会』「錦絵」	斎藤幸雄・幸孝・幸成 編/長谷川雪旦 画 天保5~7年(1834~1836)刊	1	西尾市岩瀬文庫	
42			汚破損本	現代	9	当館